地元に帰ろう。素敵なもの見つけに

脱主流派宣言 3

年の瀬の12月27日朝、島根県浜田市には雪が舞っていた。独特な赤褐色で知られる地元特産の「石州瓦」の工場では、ようやく新商品が完成しようとしていた。

「色んな人に使ってもらえるといいですね」。三浦大紀さん(33)の手には瓦と同じ粘土で焼いた「おろし金」が握られていた。工場を経営する亀谷典生さん(43)は「繊細な味を引き出したいね」と応じた。

三浦さんは浜田市の東隣にある江津市を拠点とする、地域おこしのNPO「てごねっと石見」の職員。その傍ら、県産品をPRする事業も手がけている。地元の魅力を発信する仕事をするなんて、東京にいた頃は想像もしていなかった。

夢は外交官か国連職員だった。「世界で活躍するため、色んな人や情報が集まる場所に行きたい」。大学は、迷わず東京を目指した。

早稲田大で政治を学びながら、国際機関でインターンも経験。国際会議の運営を手伝う中で出会った首相経験者の政治家に憧れ、卒業後、秘書になった。

有名企業の社長や霞が関の官僚と日々接し、国際会議に同席して世界の課題に向き合う。「東京は日本の中心だ」と実感した。

6年間の秘書生活でたまった名刺は、段ボール2箱分。ただ、仕事抜きで飲みに行ける相手はできなかった。その後、海外支援のNGOに移り、何千億円という支援金を海外に届ける仕事に関わるが、どこの誰を助けているのかが見えづらかった。現場が遠かった。

三浦大紀さん。空き屋を改装してつくったバーで、自身が手がけた石州瓦でできた特産のワサビ用おろし金を見せてくれた＝島根県江津市、筋野健太撮影

11年3月、東日本大震災が起きた。NGOの職員として被災地を回った。津波で流された故郷に向き合い、懸命に立ち上がろうとする人たちがいた。帰省のたびに寂れていく島根の商店街が頭に浮かんだ。

「手の届く場所にある課題に向き合いたい」。その年の夏に仕事をやめ、13年ぶりに島根に戻った。

地元の魅力を発見していく毎日が始まった。

おろし金の製作を依頼した亀谷さんの瓦工場は、自宅近くにあった。見学に訪れて驚いた。200年の歴史があり、粘土もうわぐすりの材料も地元産。上京前は気にもとめなかった赤い瓦の街並みが、全く違って見えるようになった。だが、地域で職人は減り、出荷量も頭打ちになっていた。

県西部・益田市の匹見町が「東の静岡、西の島根」と称されるワサビの特産地ということも初めて知った。すっとした辛さのあとに甘みが残る独特の味わい。「昔は割れた瓦ですりおろしていたらしいよ」。生産者の木暮貴之さん(38)からそう聞いた。

「二つを結びつけられないですか」。亀谷さんに相談すると、「面白いね」と乗ってくれた。9カ月かけて試作を10回ほど重ね、きめ細かくクリーミーに仕上がるようおろし金を改良した。

友人から結婚式の引き出物を頼まれた時は、松江市のお茶や出雲市斐川町の「出西窯」の湯飲みなどを組み合わせ、出雲市内で作る箱に詰めた。「こんなすてきなものが島根にもあるんだね」。そう言ってもらえたことが何よりうれしかった。

島根県の人口は47都道府県で46番目。若者は都会に出て行くばかりだ。県都の松江市にスターバックスが初出店したのは昨年。1人に会うために1日がかりなんてざらだ。でも、仕事抜きでつきあいを続ける中で、眠った「資源」に気づかされることもある。

「近くにあるのに見過ごしているものが、まだまだたくさんある。ここにしかないローカルの価値を伝えたい」

今日も四駆で県内を駆け回る。Uターンして2年。走った距離は6万キロを超えた。

（清水大輔）

世相は…集

昨年9月、2020年の五輪開催が決まり、東京一極集中の傾向はますます強まりそうだ。競技会場が集中する湾岸地区を中心にインフラが整備され、建設ラッシュも予想される。都の試算では、東京の人口は20年に1336万人でピークを迎える。五輪の経済効果は3兆円とも言われ、のべ約15万人の雇用が見込まれている。一方、震災復興が急がれる被災地などでは、人手や資材が不足するとの懸念もある。